

主催：京都文教大学人間学研究所 共同研究「ニュータウンの未来像」
 協賛：科研共同研究「ニュータウン・大規模団地の地域住環境における中間集団の役割と可能性」(B17300232:日本女子大学)

公開シンポジウム&イベント 「ニュータウンで育てる／ニュータウンを育てる」

- (1) 所長挨拶 越智浩二郎（京都文教大学人間学研究所所長）
- (2) 趣旨説明 西川 祐子（京都文教大学文化人類学科教授）
- (3) 「関東地方のニュータウンの現在」
 報告者：大月 敏雄（東京理科大学建築学科助教授）
 コメンテーター：森 正美（本学文化人類学科助教授）
- (4) 「ひきこもれるニュータウン」
 報告者：高石 浩一（本学臨床心理学科教授）
 コメンテーター：川畑 直人（本学臨床心理学科教授）
- (5) 「まちづくりは人づくり」
 報告者：竹口 等（本学臨床心理学科助教授）
 コメンテーター：石川 真作（人間学研研究所客員研究員）
- (6) 総括コメント 杉本 星子（本学文化人類学科教授）
 司会：三林 真弓（本学臨床心理学科助教授）

同時開催イベント

- | | |
|---------------------------------|-----------------------|
| 「ダンボールでオウチをつくろう！ フィンランドのレイキモッキ」 | |
| ワークショップ | 担当：小林大祐（本学現代社会学科専任講師） |
| 「休憩タイム・喫茶ハグクミ」 | 担当：佐藤知久（本学文化人類学科専任講師） |
| 「ニュータウンの絵はがき展示」 | 担当：西川祐子3回生ゼミ |

開催日：2005年12月17日（土） 会場：京都文教大学 弘誓館

三林真弓：本日はお寒い中、お集まりいただきましてありがとうございます。では「ニュータウンで育てる／ニュータウンを育てる」シンポジウムを、始めさせていただきたいと思えます。まず、京都文教大学人間学研究所の所長、越智浩二郎先生よりご挨拶申し上げます。よろしくお願いします。

越智浩二郎：こんにちは。寒い中、よくお出かけ下さいましてありがとうございます。

「ニュータウンで育てる／ニュータウンを育てる」。ニュータウンという言葉を知ると、僕自身が、大昔にニュータウンに入った頃、ニュータウンづくりに、ほんのちょっとですが、参加した頃の話をしていただきたくなりました。昭和40年の頃、日本で続々と団地というのが作られてきた頃です。千葉の習志野台団地というところに入居しました。350くらいの分譲住宅が、ひとつのコミュニティになっているわけですから、そこでも、そこで、こともあろうに、自治会

の役員をさせられてしまったんですね。当時ですからエレベーターがない時代で、階段が中心になって、各5階建ての階段の10名が階段会を作って、その中の階段委員というのが35人で、それが階段委員会、それが自治会の母体になるわけです。その中から役員を選ぶ。階段委員になること自体が、僕にとっては、もちろん、そんな気は全然ないところをくじ引きで敗れた結果で、しかも階段委員会で役員を選ぶという時にも、くじ引きか何かで、はずみで、いろんな委員がある中の広報委員なんていう役をやりました。

仕方なしに2人の役員で新聞作りから始めるわけですね。名前を募ったり、当時ですからワープロもコピー機もないところを、手書きのガリ版謄写版刷り、と言っても若い人は何のこともやら分からないかもしれませんが、想像してみてください。それで、いろいろな人から原稿を集めたり、足りないところは自分たちで原稿を書いて埋めたり。たったこれくらいの新聞なんです。毎月1回発行なんていう仕事をやっていました。

なんていうのは、このシンポの研究プロジェクトを聞いて思い出されたことですが、何でもここで、そんな話をするかということ、要は、ニュータウンづくりとか町づくりとか、そういうことは誰でもできるんだ、誰でもやっていいんだということなんですね。僕なんかほんとに無能力で、新聞づくりなんてのも一度も、小学校の時も経験がない。そんな人間でも、やらされると、なんとかやってしまうんですね。出来上がりはなんとも言いようがないものですが。僕にもできたことであれば、どんな方でも、これから自分たちの町づくりに手を貸すことはできますよ、というようなことをちょっとお話してみたくなりました。

所長挨拶なんてしょうもないんで、このへんにさせてもらいますが、あとはこのシンポが盛會に終わるように、皆さんも今日から参加して下さい。では挨拶に代えます。どうも失礼しました。

三林：ありがとうございます。それでは次に、「ニュータウンの未来像」の研究班代表、西川祐子さんより、趣旨説明を申し上げます。よろしくお願いします。

西川祐子：共同研究「ニュータウンの未来像」の代表は、司会を務めております三林さんと私でさせていただいております。私たちは、地域とともに生きる大学を目指して、ニュータウン研究をはじめました。人も、そして大学もまた、街によって支えられて生きているのではないかと考えた次第です。

私は、個人的にはジェンダー研究を専門にしております。家族研究をしながら、家族の容器である住まいを研究してきたわけですが、例えば、高齢者がいくらバリアフリーの理想住宅に住んでいても、街との関係が切れてしまえば、生きていくことは難しいのではないかと。そのことに気づいて住宅研究から都市研究、住宅研究の、地続きのような都市研究をはじめた次第です。

私たちにとって、地域といえばまず、ニュータウンです。京都文教大学の学生や教職員はスクールバスに乗って、朝には近鉄向島駅から京都市伏見区向島ニュータウンの外周路を歩いて大学へ向かいます。そして夕べには大学を出て、宇治市グリーンタウン槇島と京都市向島ニュータウンの間の道路を歩いて向島駅へ向かうわけです。私たちの大学は2つのニュータウンに隣接する大学だと思います。従って一番近所は2つのニュータウンなわけですが、私たちはニュータウンがただ、ご近所だからというだけでニュータウン研究をはじめたわけではなくて、ニュータウンは社会全体の将来を占うような先端的部分だと考えて、だからこそ、住人の方々とともにニュータウンを考えたいと思ってまいりました。

ニュータウンは経済の高度成長期である1970年前後に全国各地に働く人々の生活、未来の生活の希望を託すような、理想の計画都市として建設されました。例えば、私も最近知ったことなんですが、向島ニュータウンは、1980年に開

発計画が全国的にも優れているとして、建設大臣表彰を受けてます。それからグリーンタウン横浜は、これも私たちの研究の途中のフィールドワークで、たまたま設計をした方にお会いしたんですけれども、当時の日本住宅公団の英知を集めて住みやすい多様な設計を考えた公団ご自慢の作品だというお話をお聞きました。そのニュータウンは以後、30年40年の間に少子高齢化をはじめとして社会全体の動向を数年早く先取りしながら、人口構成その他を変化させてまいりました。ここで起こっていることは社会全体問題の先取りであると同時に、また、早々に問題と取り組んでこられた方々の知恵から私たちが学ぶことは大変多いと考えております。

今回は、本共同研究3年目、第3回目のシンポジウムです。第1年度には、「閉じられたニュータウンを安全にひらく」をキーコンセプトとして、宇治市男女共同参画課と協力致しまして、「集まって暮らすー ジェンダーをひらこう」という題でシンポジウムを開催致しました。昨年度、第2年度目には「つなぐ」をキーワードにして、京都私学会館で「個をつなぐ住まいー 住む側の実験と建てる側の実験」を開催致しました。今回のキーワード「育つ、育てる」は、時間的経過を重視するキーワードです。ニュータウンで今まで何が育っているのか、今何を育てるのか、これからニュータウンがどのように成熟していくのかを考えるために、3つの報告を用意致しました。

第1番目の大月敏雄さん報告は「関東地方のニュータウンの現在」と題しまして、建築計画をご専門となさる立場から、ニュータウンの現在や再開発問題など、主に関東地方の事例についてお話くださいます。第2の高石浩一さんの報告は「ひきこまれるニュータウン」と題しまして、これは容器の話だけではなくて、部屋の内側がどうなっているか、中味のお話です。そして第3番目の竹口等さんの報告「まちづくりは人づくり」は、長年携わってこられた京都駅に近い崇仁地区のまちおこしの成果についてお話をいただきます。ハードを整備し、ソフトである生活が回転していくための人間関係が育つため

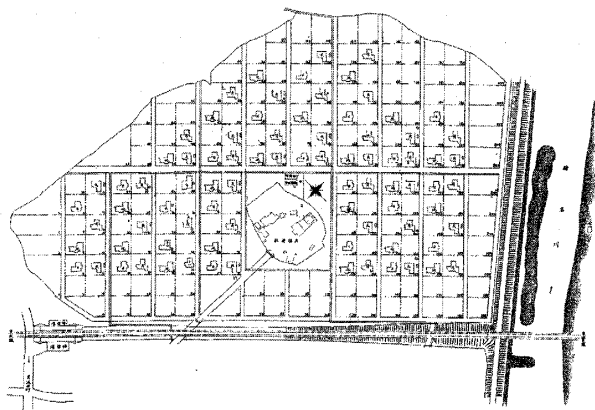
に、地域と大学は力を合わせてどのようなことができるかということにつきましては、会場からご発言をいただく討論の時間を少し多めに取っておりますので、なにとぞよろしくお願いいたします。

三林：早速、第1報告「関東地方のニュータウンの現在」というテーマで大月敏雄先生にご報告いただきます。大月先生は東京理科大学建築学科の助教授でいらっしゃいます。本日は東京からわざわざお越しいただきました。どうぞよろしくお願い致します。

大月敏雄：ご紹介にあずかりました東京理科大学の大月です。建築の専門なので、ちょっと専門用語を使うかもしれませんが、ご了承下さい。私が考えておりますお話は、大きく2つございます。1つ目はつくる側の理論として団地を設計する話です。そしてもう1つは、つくられた団地が、実は使い手側から見て、そんなに使い勝手の良いものでなかったり、あるいはせっかくお金と英知をかけてつくったのが、なかなか住民に評価されなくて、使えないものになっていくとか、いろいろとギャップがあります。そのへんのギャップの話を後でしゃべろうと思っております。

まずは、日本のニュータウンの第1号って一体どこだろうかと考えた時に、今、定説になっておりますのは、阪急宝塚線の池田駅というのがあります。その横に池田室町という住宅地があります。小林一三さんなんかが旗振り役で開発したところです。明治43年に開発されました。郊外に駅をつくって、駅の近くの土地を買収して、造成した土地を売るというやり方で開発された、第1号というところです。

ある人から聞いたところによりますと、ニュータウンじゃなくて普通の市街地にあるものが3つあるそうです。1つは赤提灯。つまり気軽に行ける飲み屋ですね。もう1つは大木。もう1つは宗教施設。神社とかお寺。ニュータウンではそういう宗教くさいのが全部排除されていますが、池田室町が面白いのは、もともとここに



池田室町配置図（住宅生産振興財団編『日本のコモンとボンエルフ』日本経済新聞社 2001 年より）

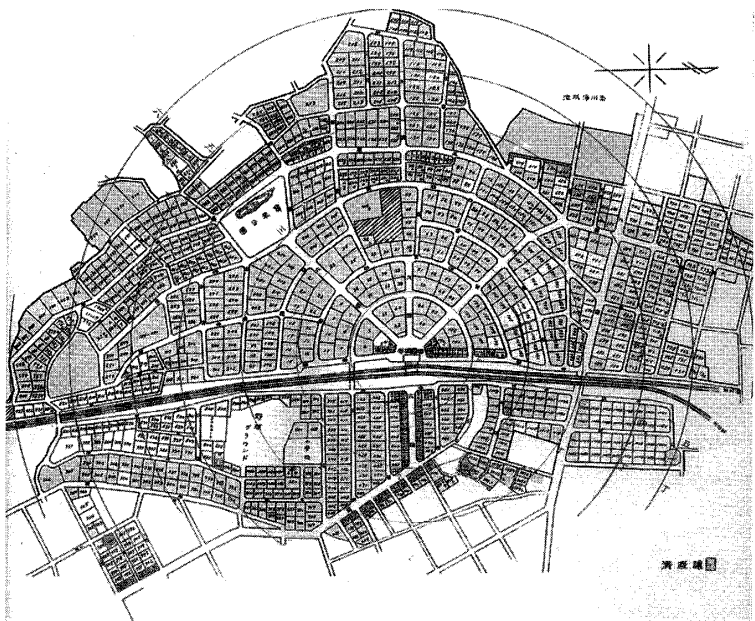
呉服神社というのが開発前からずっとあって、その周りが開発されたのです。実は昨日、ここにはじめて行ったのですが、当初の建物の多くはもう取り壊されたり、敷地が相続税などのために細分化されていたのですが、所々、昔の邸宅が残っているわけです。そして、呉服神社のような宗教空間だけは、大木と共にきっちり残されているわけですね。ですから、こういうニュータウンの中で、いわば「へそ」のようなものを持った空間であるということが、非常に面白んじゃないかなと思いますが、残念ながらこれ以降のニュータウンには、そういう代々受け継がれる「へそ」となるようなものがないというのが、日本のニュータウンの1つの問題ではないかと考えたりします。

池田室町の開発より10年ばかり前に、イギリスで田園都市というものがハワードによって構想されました。向こうはロンドンのスラムの状況が大変厳しかったわけで、都会と田舎の両方の良いところを兼ね備えた都市をつくりたいということで田園都市というのをつくります。これが世界各国のニュータウンのムーブメントの1つの原点になるわけで、街並みとしては中世ドイツとかの村落の街並みをつくらうという動きがあって、フランス・ドイツ・アメリカそして日本なんかも、大きく影響を受けております。日本の

場合だと、明治の末期から大正時代にかけて、田園都市のような街をつくりたいというのが流行るわけです。

次に、大正時代に構想された日本で最初の田園都市をご紹介します。かつて東京帝大総長であった内田祥三が若い頃に絵を描いているのですが、湾曲した外周路があって、公園があって、運動場があって、真ん中は店舗併用住宅となっています。小学校と運動場と住宅地、公園みたいなものをセットにしてつくる、そういう街づくりの発想が、日本では大体、大正時代の末期に形成されております。

次に、東京の田園調布に移ります。これは渋沢敬一が大正7年に田園都市株式会社というのを設立して、小林一三さんを阪急から招いて、半円形状のニュータウンをつくったものです。大正12年に完成します。ただこれは、一種のベッドタウンとなっています。ハワードの田園都市というのは、住まいの場と働く場をセットにしたニュータウンをつくらうということで始まったのですが、日本の多くのニュータウンの1つの問題点は、働く場が住む場所にならないことです。この田園調布が、関東でできた本格的なニュータウンとしては最初の部類に属します。ここでは居住者が、田園調布会という社団法人を戦前



田園調布配置図（住宅生産振興財団編『日本のコモンとボンエルフ』日本経済新聞社 2001 年より）

からつくっていて、今も立派に管理されている、非常に有名なところですよ。ここでもう1つ面白いのは、開発の時に団地のルールらしきものをつくるんですね。他人の迷惑になる建物を作るなどか、建物は3階建て以内にしろとか、例えば建築費を一定額以上とするとか。要するに、土地を提供するだけではなくて、建物についても開発側がルールを示してあげるといような、そういうまちづくりがなされております。

田園調布が完成した大正12年には、関東大震災がありまして、財団法人同潤会という組織ができます。今の都市再生機構の、言ってみれば、ずっとご先祖様に当たるような、国の外郭団体なんですけど、そこが作った団地なんかも、ハワードの田園都市の街並みづくりの影響を受けています。

一方で、ニュータウンの計画については、1920年代（日本でいえば大正末期から昭和初期）に、アメリカから1つの新しい考え方が出てくるんです。近隣住区理論です。田園都市運動がアメリカに飛び火して、アメリカのニューヨークの周りにいっぱい田園都市もどきができるんですが、その中でペリーという、社会学に近い立場の人が、ニュータウンをつくる時のコミュニティの単位を近隣住区論として提唱しました。小学校を1単位とする、人口でいうと8千人から1万数千人の規模をつくって、真ん中にコミュニティセンターと小学校をつくって、はじっこに商店をかためてつくらせる。真ん中は車が入らないように、住宅地内の道路を複雑にさせています。それを発展させて実現したのがラドバーンというニュージャージーにあるニュータウンです。車がニュータウンの外側を走って、真ん中に緑地を配置する。そして住民は、住宅地内でつながっている緑道とも公園ともつかない緑地をつたって、真ん中にある小学校に通う。そのために、トンネルなんかをつくったりしています。見事な歩車分離型になっているのです。今日、横島とか向島のニュータウンを見てきたのですが、こういうトンネルがあるのは、実はラドバーンがおおもとで、そこからずっと継承されているわけですね。



ラドバーン配置図 (Richard Plunz『A HISTORY OF HOUSING IN NEW YORK CITY』Columbia Univ. Exp.1990年より)

この近隣住区論は、日本ではいつ頃実施されるかということ、先ほど申し上げた同潤会を昭和16年に継承した、住宅営団という国家直属の組織に採用されます。住宅営団の団地の多くは区画整理で出来ておりまして、そうした団地を形成する技術が少しずつ蓄積され始めました。そうした蓄積が、戦後の千里ニュータウンなんかの設計手法に継承されていくわけです。

その後の団地づくりの1つのターニングポイントとして、1970年代の半ばにボンエルフという考え方が、オランダで生まれます。歩車共存、要するに車がスピードを出せないようにするというような設計テクニックがいろいろ紹介されて、特に日本の気の利いた戸建住宅については、これが導入されています。

以上が、大まかな団地計画技術の日本における変遷ですが、つくる技術だけではなくて、住まう技術、建築とか街並みを守っていき、育てる技術として、建築協定という、建築基準法上の協定があります。要するに建物の外壁を引

込めて揃えとか、色を統一するとか、そういうものが公的制度としてあります。それを都市計画として落とし込んだものが地区計画です。日本では主にこの2つの街並みを継承していくための制度が採用されています。

一方で、住宅メーカーなどは、こうしたまちなみづくりに対してどういうことを考えているかという、住宅生産振興財団という、メーカーなどが出資してつくった財団がやっている「住まいのまちなみコンクール」というのがあります。このお手伝いを今年やったのですが、今までのメーカーは作りっぱなしというか、作ることが主眼であったのですが、このコンクールの面白いことは、住民が参加してまちなみづくりをやっているのを褒めましょうということです。やはりメーカー側としても、一度作った街とか団地を、より適切に使い込んでいこうというようなところに関心がシフトしつつあるようです。

このコンクールで、一等賞をとったのは、コモンシティ星田という、大阪にある戸建て団地なんですが、非常に丁寧な設計がされており、住民がその設計精神を受け継いで丁寧に管理し続けているということで、評価されています。他の受賞団体は、30年近くずっと建築協定を守り続けているという団地が表彰されています。あと面白いのは、東京は震災と戦災で焼けたので、昔のまちなみがあまり残ってないのですが、東京にも町屋や路地のたたずまいで有名な谷中というところがあります。こういうところの住民たちが自分ところの町で、古い住宅をNPOが買い取って運営しているという活動なのですが、こういうのも表彰されています。

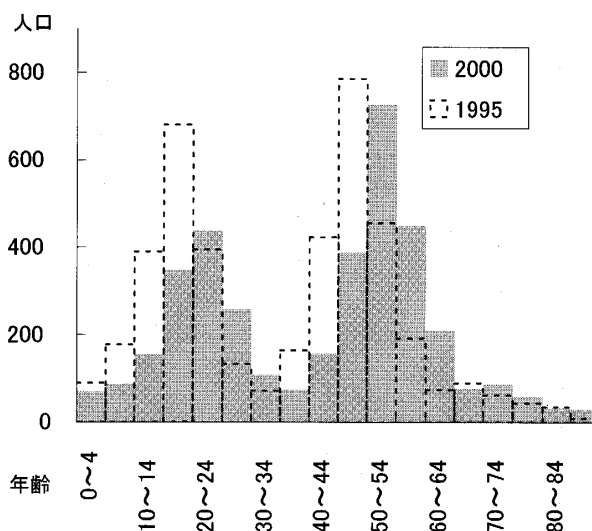
そうした中で、私が最近注目しているのは、東京の郊外にいっぱいある空き区画です。どれくらいの数があるのかということを調べようと思ったら、国交省も都道府県も、誰も把握していないのです。つまり、民間の開発の動態を一元的におさえている人間が日本には誰もいないということが判明しました。じゃあ私が調べようと思って、学生さんと一緒に、とりあえず関東圏の県や市町村を回ってデータを集めたわ

けです。

郊外団地の開発には主として2種類あって、1つは区画整理事業、もう1つは都市計画法上の開発許可制度にもとづく事業があります。区画整理は比較的、補助金が出たりするので公的なデータがあるわけですが、開発許可についてはデータが一元的に整理されていません。

結果を見ますと、年が経つごとにどんどん郊外化しているのがわかるのですが、かなり空き区画があります。ところが、実際に観察してみると空き地が畑になったり、普通の住宅が病院とか学習塾になったりしています。私はこういうプロセスを、住宅地が「まち」になると言っているわけですが、住宅ばかりしかないところが、こういう風に、人間が手を加えることによって、普通の市街地になっていくことは、大歓迎なことだと思っています。

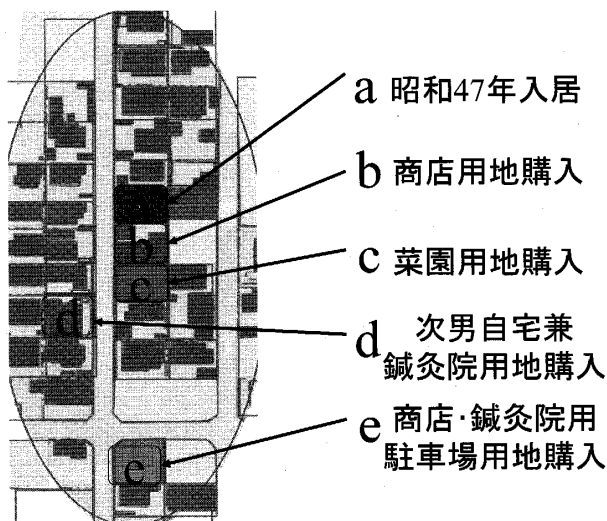
我々の調査では、関東の開発許可団地の約2割の土地が空いているということが判りました。どういうところが空いているかというと、バブルの頃に頑張って奥地に開発したところなんです。こうした中で、ひとつ大きな問題は人口動態です。ある団地の、1995年の人口構成を見ますと、見事な双こぶラクダ型となっています。こ



ある茨城県の団地の人口動向：1995年と2000年の比較（西尾直樹、南勇作『茨城県の民間大規模戸建住宅団地における土地利用と居住者属性に関する考察－開発許可団地を対象にして－』東京理科大学工学部建築学科卒業論文2005年より）

これは、団地に一挙に住みついた世代とその子世代に人口が集中していることを示しています。それから時間が経ちますと、親世代子世代ともに年を重ねるわけですが、子世代が20歳前後になるとそこだけ減ってくるわけです。このまま行くと高齢者団地になっていくのが明らかです。これはニュータウンにおける全国共通の話題かなと思います。もうひとつ面白かったのは、就業先の変化です。年がいけばいくほど地元で働く人の割合が増えてくる。つまりリタイアして地元で職を得る。要するに地元化していくわけです。このような高齢団地化と地元化の2つのテーマを今後、計画論としてどう捉えていくかということが非常に大事なと思います。

次に、茨城県のある町で、都市計画マスタープランの策定をやった時に調べた団地の例をご紹介します。この団地は1970年頃に民間によって開発されたのですが、未だに半分近くが空き地なんですね。ところが、ここでは団地開発者が思いもつかないような、住みこなしが見られます。例えば、あるお宅では、昭和47年にここへ入るわけです。このような中規模な団地はたいがい、住宅しか建っていないので、そこで何か商売を始めると儲かったりするんですね。商売敵がないから。そうすると、ちょっと金出



茨城県美野里町の団地における複数区画の利用例
(深見かほり『茨城県美野里町の大規模住宅団地の居住実態と住環境の運営に関する研究』東京理科大学工学研究科修士論文2003年より)

して、隣に奥さんがちっちゃな、日用品店をつくるわけです。そうすると当たっちゃって、そのお金でさらに隣に空いていた土地を買って自家菜園にするわけです。そして今度は子どもが鍼灸院の学校を卒業して、道路の反対側の空き地を使って鍼灸院の病院兼自宅をつくる。そして今度は、団地の角地に商店と鍼灸院用の駐車場をつくる。こういう団地を住みこなしていくプロセスというのが、実はあちこちで起きている。それはどうして可能かという、それは空き地があったからだと思うんですね。ですから、こういう、空き地の有効利用をいっぱい、みんなが知恵を出してやっていくということによって、団地が今後楽しくなっていくんじゃないかなと思います。

で、もうひとつは、それを集団的にやっているとところがあるんですね。例えば菜園がないから、団地の空き地の地主さんをお願いして、集団で菜園、要するに畑を耕させてくれと言って畑になったり、集団で駐車場をつくったりしています。このように団地を集団で管理していくことによって、いわば「まちが耕される」というプロセスが生じるわけです。これをいろいろ調べますと、やはり町内会とか何とか会といった、いわゆる中間集団が活躍しているわけです。最近流行っているNHKの『ご近所の底力』を見ると、こうした中間集団のもっている知恵が詰まっている。こうした知恵をいっぱい集めて、どういう風に使えるのか議論しようというのが、この共同研究の、ニュータウンの研究で行っていることです。

三林：大月先生、ありがとうございました。では、大月先生の報告を受けて、京都文教大学文化人類学科助教授、森正美さんより、コメントをいただきます。お願いします。

森正美：大月先生、どうもありがとうございました。京都文教大学の森です。よろしく申し上げます。「関東地方のニュータウンの現在」というお話をさせていただいて、私はそれを受けて、ここが京都の宇治という関西の地なので、

関東と関西の比較、似ているところとか違うところというような話をさせていただくべきなのかは思うんですけども、皆さんも今、お聴きになって感じられたように、むしろ大月先生のお話からは、関東関西を問わず、ニュータウンが抱えている問題は共通していると感じました。つまりそこで抱えている問題も共通していれば、むしろそこでの解決を目指した工夫から、私たち自身が学べるものがたくさんあるというのが、今回の大月先生のお話を伺った全体的な印象でした。そこで、今回のシンポジウムのテーマで、先ほど西川先生からご説明があった点と少し結び付けてお話をさせていただきたいと思います。

「時間の中で育てる」という言葉がキーワードになるのだ、というお話だったと思います。ニュータウンという場所を考えた時には、建物の耐久年数というハードの命というものがあり、私たち一人一人の人間の人生の時間のようなものがあり、さらにその人生が途切れた後にも生き続けていく街の時間というか、街の命のようなものが、多分あると思います。

大月先生がおっしゃられたように、作る側と住んでいる側の現実として、いろんなことがズレているというのと同じように、この時間軸というの、ある部分では重なっているんですけども、大きなところで様々にズレが生じているわけです。これが先ほどの大月先生のお言葉の中で言えば、家が建てられて、それが街になって、さらにその街の中でまた人々が家を作って、街を住みこなしていくというプロセスの中で、私たちはズレたり重なったりしながら、その命や時間が継続していく姿を見ることができんだと思うんですね。

すごく大きなヒントをいただいたなと思うことがまずあります。それは京都の向島、宇治の檜島のニュータウンでも抱えている問題で、あるいはニュータウンが先進地域だということを考えれば、どの地域でも同様に抱えている、高齢化というような問題です。人が年を重ねていけば、動ける範囲も変わってくる、生活圏がなかなか広がりにくいということがあります。で

は、その中で、空間的に広がれないのであれば、その中で暮らし方を、どう住みこなしていくのかということを本当に考えなければいけない。ただ、住みこなすという余裕が地域にあるのかという問題も当然あって、その時には、快適さや居心地の良さを求めるという以前に、もっと議論されなければならない深刻な問題があるのかもしれませんが。私は文化人類学を専門としていますが、そういう切実な問題をどのように、本当に生活している人たちの声からいかにして聞いていくことができるのかということの前で、正直言って非常に悩み、立ち止まり、うろうろと這い回っているという感じがしています。

それはなぜかということですね。いろんな思いを伺って、それを育てて形にしていかなければならないということは思っていますし、一人一人の方とは出会えるんですけども、その思いがつながる場所というのに出会えることが少ないし、そういうものが本当に今、あるのだろうかということに疑問を感じているのです。話がずれるようですが、先週、京都市でまったく違う主旨の、若者世代から京都市の施策についての意見を言ってもらおうというシンポジウムをやりました。そのコーディネーターをやらせていただいたんですけども、そこでもやはり感じたのは、さまざまな思いは存在するし、若い人たちもいろんなことを考えている。でもそれを形にする場や仕組みがないということでした。その時に私は、先ほど西川先生がおっしゃったような、大学としてできるっていうことを考えなくてはいけないと感じました。また同時に、今日来ていらっしゃるかどうか分からないんですけども、行政が持っている役割というのはこれまでとは違う意味で非常に重要になっていると考えています。

先ほど大月先生が時間切れでおっしゃられなかったんですけども、空地、空いているところをどう利用するかというのは、実はこれはもう、行政上の様々な規制が最も絡んでいるような部分で、それを、茨城県の美野里町というところでは、きちんと町の条例にするということ

に成功しています。つまり、地域の中の声や、団地の中の声が、町全体の知恵として、現実に行政の制度を通して実現されている。そういう仕組みを、大学にいる私たちがある種の媒介になって作っていくことはできないのかなっていうことを、これからもっと考えていかななくてはいけないのかなと思っています。すみません、長くなりました。ありがとうございました。

三林：ありがとうございました。では2つ目の報告にいきたいと思います。「ひきこもれるニュータウン」というテーマで、京都文教大学臨床心理学科教授、高石浩一さんより報告をお願いします。よろしくお願いします。

高石浩一：どうもはじめまして、高石です。今日は「ひきこもれるニュータウン」ということで、タイトルの的には、正しくない日本語のタイトルをつけてしまったような気がしてるんですが、とりあえず、いろいろな意味合いを込めてこの言葉を選びました。

普段私は不登校とか引きこもりの人たちとお会いしているわけですが、そういう人たちの引きこもりという状態をどのように捉えるのかという点について、実はずっと葛藤を抱えていて、その点について考えていきたいと思っています。前回、引きこもっておられる人の部屋の中を写してもらった写真を中心に、内輪の会で発表させていただいた時に、人間学研究所長の越智先生のほうから、「長期間引きこもれるのは、大変な能力だ」というお言葉をいただきました。私自身もそういう風な観点はすごく大事だなと思っているわけですが、ただ、それが能力なのか。引きこもりの人たちに部屋から出て行ってもらうように働きかけるといことは必要なのか、それとも必要でないのか。引きこもりを保障するべきなのか。引き出すという言い方はあまり良くないですけども、とりあえず出て行ってもらうほうが良いのかどうか、そこをずっと考えながら、仕事をし続けています。引きこもらざるを得ないのか、引きこもれる能力をむしろ重視するのか、

この2つの考え方に引き裂かれているわけです。

もし、引きこもらざるを得ないという、ネガティブな形で考えるのであれば、これは外に出られないってということでもあるし、引きこもっているという状態を維持することに、すごくエネルギーを使う。壁を厚くすることにエネルギーを使ってしまえば、おそらく中身を豊かにしていく、自分の部屋の中を豊かにしていく、そしてまた自分の部屋に代表されるような精神内界、そういう内的な空間にエネルギーを注いでいくっていうのはなかなか難しいんじゃないか。つまり、引きこもっている人は、やっぱり早く出て行ってもらったほうがいいんじゃないかという考え方が成り立つんじゃないかと思っています。

もう一方で、もしそれを引きこもれる能力だと見るならば、外に出ないということ、出られないのではなくて、外に出ないんだという、ある種の意志的な動きとして考えることができる。われわれ臨床の立場の人間たちは、今まで比較的この考え方に立脚して仕事をしてきたように思います。私は大学院の頃、「一時期、決然と休んでもらう配慮」をしなくてはならないという言い方で、不登校、引きこもりの人たちに対して、いわば引きこもった状態でいて下さいというスタンスで接していた記憶があります。ただ、それが、10年20年に渡って引きこもっている方々を生み出してきたという時代背景もあって、それで本当にいいのかということが問題になってきているわけです。特に僕の中では問題になっているわけです。もし、引きこもれる能力だと考えるのならば、それは外に出ない意志的な動きである。また、引きこもっていることで蓄積されたエネルギーが、外に出て行くエネルギーに転換していく可能性があるのではないかと考えることもできる。そしてまた、引きこもっている間に内的空間が創造される、精神内界もだんだん豊かになって充実していく、という風なスタンスで考えることもできるのではないかと思ったわけです。

その具体的な例として、前回、内輪の会で発表した写真を持っています。このA君は、

資料1

資料2

どちらかというと非常に閉ざされた空間の中で生活していた、引きこもりだった人です。今はもう、出てきてますが、彼の引きこもっていたプライベートな部屋の写真を、本人に写してきてもらったのがこの写真です（資料1）

これは入り口のほうから見た写真なんですが、彼の部屋はこういう風なカタチで、自分自身の生活空間を作っています。とりわけ、このコーナーの隅ですね。ここは彼にとってはかなり大事な物が集めてある所で、好きな漫画であったり、資料であったり、写真であったりゲームであったり、そういうものを全部、こういう形で積み上げて、集積しているという構造になっています。

ここは、彼の部屋の入り口部分です（資料2）。彼に説明してもらったんですが、入り口から奥に向かって、だんだん外側から内に向かって、自分自身への距離が近くなっていく。だから、この出入り口の部分は、一番外に近い所だから、一番外に近い物を置いてあると言うんですね。見ていただければ分かるように、外行き

資料3

の服であったり、外行きの鞆であったり、内着になるほど、こっち側にぶら下げているということです。つまり彼は、この空間を外側から内側に向かうように、また部屋の中も、外から内に向かう空間として構成しています。この奥にはもちろん、彼のプライベートなものがもっと詰まっているということです。

一方B君の場合、こういう形で並べるのは本意ではないのですが、今回の発表では、分かっていたかやすいかなと思って、対照的な2人という意味合いで出させていただいていますけれども、B君のほうが、実は引きこもりの時期は長期に渡っています。

彼の場合は、こういう和室の部屋に10年くらい暮らしてました。テレビもあってオーディオもあるんですけども、このあたり、かなり日常生活の物が散ってます。単に散っているというわけではなくて、細かく見ていくと、彼の物と彼の物でない物が混在しているという形になっています。これはどういうことかというと、彼の部屋は彼の部屋として構成されているのではなくて、彼の部屋にさまざまな家の道具が入り込んだ形で作られていて、彼はそれを許容した形で生活をしている、引きこもっているということです（資料3）。

彼の部屋は典型的な古いお家で、ガラス戸で仕切られていて、外から覗けるような状態です。自分自身の部屋で、外界からの視線にさらされている、ある意味では充分に引きこもれていない部屋に、彼はずっと引きこもっていたということになります。いわば充分引きこもりが保障されていない状態で、彼は暮らしていたと

いことが言えるかもしれません。

引きこもっているということをポジティブな方向で考えるならば、そこで内的空間が作れるだろうし、引きこもるっていうことをネガティブな風に考えるならば、それはやはり「逃避」なので、出てきてもらうことを考えないといけない。

では、長期間引きこまれる部屋というのは一体どういう風な部屋なんだろうと思いついて調査をしたのが、以下の報告です。例えば、こういう風な部屋であれば、皆はどんな部屋に引きこもろうと思うんだらうか。入り口の近所なのか、それとももっと奥の方か、和室に入ろうと思うのか、トイレのそばに行こうと思うのか。集合住宅というのは、同じ形式の部屋がたくさん作られています、こうやって考えると、その部屋のパターンによって、引きこまれる部屋はかなり偏るのではないかと思います。引きこもろうと思う時の理由はどんな風に考えられるのかということで、まず学生に調査をしました(資料4)。

例えばこのAタイプの家の場合、一番比率が高かったのは、4.5帖の洋室で、77%の人がここを選びました。その時の理由がポイントだと思います。「狭いから」「トイレに近い」「ドアが1

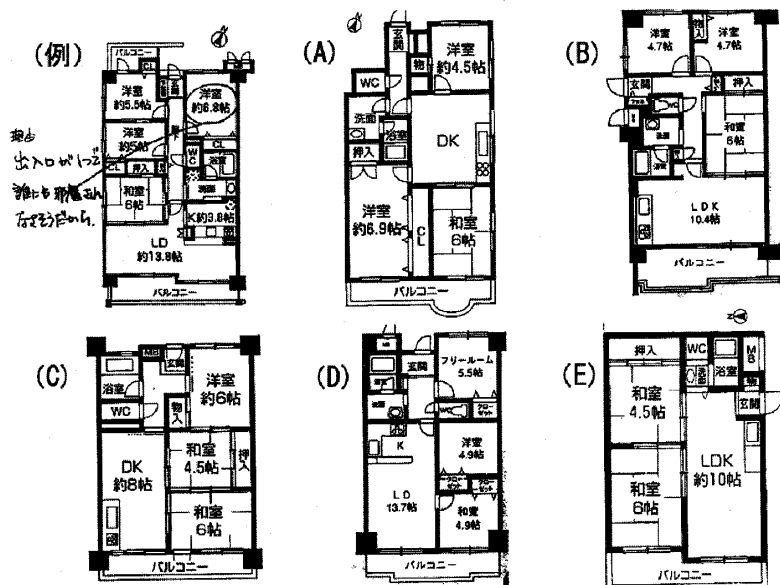
つだけだから」ということが理由に挙がっているわけです。その次に挙げられたのが洋室で、10%の人です。「押入れに入れる」「広い」という風なことを理由にして挙げています。さらに和室6帖というのは9%の人で、「玄関から離れている」「畳で落ち着きそう」というのが理由です。玄関から離れているという、この部分は、後でまたちょっと申し上げますが、実は観念的なものかもしれない。本当に引きこもっている人たちにとって、玄関から離れていることは必ずしもメリットではないかもしれないからです。

このBタイプの部屋だと、右と左に洋室の4.7帖があります。ここが玄関で、入ってきて近い方を選ぶのか、遠い方を選ぶのかということですが、この右側、入り口からちょっと遠い方のこもった部屋、これが80%の人です。「玄関やLDKから遠い」「人の気配がしなさそう」「押入れがある」ということが理由になりました。この左側のほうは17%で、「玄関から近くて、家人と会わずに出入りができる」ということがポイントになっています。で、和室の6帖ですね、「トイレに近い」「玄関から見えない」ということがポイントになっています。トイレにこもる人も、時々まいるようです。

Cタイプの場合、玄関がここにありますね。玄関から入ってすぐの部屋っていうのは、わりとどこのマンションでもあるのですが、「誰にも会わずに出られる」ということで洋室の6帖を74%の人が選んでいます。「一番奥だから」「和室で心地よさそう」ということで、和室6帖を選ぶ人は13%あります。

Dタイプは、「誰にも会わずにトイレや風呂に行ける」「他の部屋から離れている」ということで、フリールームという部屋が選ばれました。あとで言いますが、フリースクールに行っている引きこもりの人たちにも、同じ調査を

(例) にならって、各タイプの集合住宅で「引きこもれそうな部屋」をそれぞれ選んで理由も書いてください。



資料 4

やったところ、ここを選ぶ人が一番多かった。このDタイプだけに関して、ここを選ぶ人が多かった。それから、「バルコニーに出られる和室」がいいと、ここを選ぶ人も結構いました。

Eタイプ、和室4.5帖が一番多くて、「狭い」「押入れがある」「窓がなく、暗そうで落ち着く」というのが理由になっています。和室の6帖が10%で、「玄関から遠い」「押入れがないから誰も入ってこない」「すぐにバルコニーがある」。だいたい、このような結果になりました。

一方、引きこもりの人たちにも調査をやってもらったのですが、十分なデータが集まりきる前に、この日が来てしましまして、実はまだ、依頼している最中の分が結構あります。とりあえず集まった分だけを、簡単に言葉で置き換えると、ほとんど「玄関からすぐの部屋がいい」という理由です。結局われわれは、引きこもっているということに関して、奥の方でひっそりともるんだという風なことを念頭に置き過ぎてるんじゃないかと思います。実は玄関からすぐの場所がいい。今のところ、依頼している引きこもりは集合住宅よりも一戸建てに引きこもっている場合が圧倒的に多く、その場合は、玄関を入るとすぐに階段があって、そこを上がったらすぐに個室があって、そこに引きこもっている。これが8人中7人の引きこもっている人たちの状態です。考えてみると、集合住宅は、実は引きこもれる場所が非常に少ないし、また引きこもれないのかもしれない。一戸建ては逆にいうと、引きこもりを助長する空間ということが言えるかもしれないです。

改めて「引きこもれる部屋」という言い方で見直した時に、A君の部屋のような場合、やっぱり単に引きこもるだけではなくて、引きこもることによって、心的空間の創造と充実を意図している。しっかりとシャットダウンして外側と内側とを分けて、その中で内的な空間を充実させているという印象が非常に強いわけです。逆にそこの部分がガラス戸になっていると、あるいは非常に外側から侵入されやすいような構

造になっていると、やっぱり内的な空間の充実といった意味で、ちょっと弱くなっているのではないかなという気がします。

そしてもう1つは、玄関からどうかということです。A君の場合、玄関からは離れてますけれども、窓から外を覗けることは彼にとってはすごく大事だったと、コメントしていました。彼らはやはり内向きではなくて、外に向いている。つまり、玄関から近いことが引きこもれる条件であると。われわれが考えている引きこもりと、実際に引きこもっている人たちが考えている引きこもりの、引きこもれるというメリットは、実は外に向かっているところにあるのではないか。この部分をもう一度、考え直してみたいという風に思いました。今回は以上のような報告です。

三林：ありがとうございます。では、この報告を受けて、京都文教大学臨床心理学科教授、川畑直人さんよりコメントをいただきます。よろしくお願いします。

川畑直人：京都文教大学の川畑と申します。よろしくお願いします。臨床心理学科ですので、高石先生の同僚ですけれども、今のご発表について、いろいろと感想をお話します。臨床心理学では、引きこもりをどう考えるかといった時に、高石先生も言われてましたが、心的な世界・内的な世界を充実させるという肯定的な面があるんじゃないかという指摘が従来からあったわけで、それが引きこもりを遷延化させることにもなったという点は、歴史的に考えなければならぬ部分だと思います。

私の立場から言うと、引きこもりによって、内的な世界が充実するというふうには思っていません。やはり、人間の心が充実していくというのは、人との関わりを前提としているというのが私の考えですので、その意味では内的世界が、引きこもりによって充実するとは思わないんです。ただ、内的世界が充実するために、引きこもりの状態が必要になる場合があるということは、私も思います。

というのは、よく例えられるわけですが、鎖国状態というのがあるわけで、日本の文化が非常に豊かになる時に、外国文化からの侵入を防いで、中で非常に発酵する時期があるわけですね。常に外の世界にばかり目を向けていると、中の世界が育たないということがある。ただ、それが、健康に進む場合というのは、それが非常に可変的に進行する、柔軟性を持って進むということが前提なんじゃないかと思うわけです。

で、今回の高石先生の非常にユニークな発想法というのは、引きこもりというものを生活空間、部屋の構造というものと兼ね合わせて見ようとしているということですね。そこで見えてきている、先ほどのご指摘ですが、玄関に比較的近い位置に引きこもりの人が位置しやすいという点が興味深い。これは、写真を見せていただいたAの方もですね、外に出るドアの近い所に、非常に意識して服をずっと並べているところがある。それからBの人も、家族との所有物の共有とか、流通の部分というのがたくさんあるということを考えると、必ずしも引きこもりというのが奥のほうに引きこもっているということだけではないんじゃないかというのは、すごく同感しました。

その時に1つ考えなくてはいけなのは、接触を避けようとしているのは誰なのかということですね。それは一般的に他者という風にも言えるんですが、まずひとつは、その玄関に近いということ言えば、家族との接触を回避したいということがあるんじゃないかという風に思います。家族との接触を回避したいのであれば外に出て行けばいいじゃないかと、家の外に出て行けばいいじゃないかという風に思えるんですが、それができないというのが、引きこもりを理解するひとつの手掛かりになるのではないかと思います。その中で、の落ち着いた方とか、その中で、選択というような要素があるのかもしないかと思いました。

最初ですね、大月先生のお話を聴いていると、この引きこもりとの関係で、いろいろとヒントになることがあってですね、高石先生がさ

れているように、空間との関係で考えるというのが、非常に興味深いと思いました。日本の団地というのは住のみで職と離れているという問題。それから、空き地という、手を加えられる場所、そういう余裕が残されていることが町を活性化させる部分があると。こういった空間のことと、人間の心理的なものとの有り様にはずいぶん共通性があると思いました。必ずしも団地が引きこもりを生むとは言えないんだけど、その関連についても、これからもっともって考えていいんじゃないかなという風に思いました。以上です。どうもありがとうございました。

三林：ありがとうございました。ここからしばらく休憩タイムを取りたいと思います。隣の部屋では、喫茶「ハグクミ」を開店し、京都文教大学文化人類学科の佐藤知久さんが店長として皆さんのお越しをお待ちしております。どうぞ、ニュータウンの絵はがきや、ダンボールでお家を作っている親子の様子などをご覧になりながら、しばらくご休憩いただければと思います。

<休憩>

三林：第三報告「まちづくりは人づくり」というテーマで、京都文教大学臨床心理学科の竹口等さんにご報告願います。竹口先生は人権論、ボランティア論がご専門でいらっしゃいます。どうぞよろしくお願いいたします。

竹口等：はい、それでは報告を始めさせていただきます。私は「まちづくりは人づくり」というテーマで、崇仁地区というところに長年関わっておりますので、そのことを踏まえてお話を聞いていただけたらと思っております。崇仁地区というのは、京都駅の東側にありまして、256,000㎡のまちでございまして、甲子園球場の6.5倍の広さです。まちづくりがずいぶんと停滞をしております、崇仁での原動力という形で、まちづくり推進委員会が立ち上がっ

て10年経ちます。その様子を、皆さん方にご報告、ご紹介させていただきたいと思っております。

一般的にまちづくりということを考える時には、一つはまちづくりの横軸といいますか、まちづくりのプランニングにかかわる点があります。その中の一つは、理念やコンセプトです。どういうまちを作るのか、賑わいがあるまちとか、静観なたたずまいのあるまちというような、まち全体をどのようなものにするかという理念が必要になります。第二の横軸に、それらの理念に沿ったゾーンや景観等の全体像、地区割当・配置などを含めた計画が必要となります。住宅をどこに建てたいとか、商店街、福祉・医療・教育等の施設をどうしていくのかという点です。第三の横軸には、それらの具体的なプランが必要となります。面積や住宅であれば間取りをどうするのかというようなプラン作りが必要になってきますし、それと関連して第四には、予算や経費や、そういうものを誰が負担・分担するのかの協議が必要となります。最後は、建設等の業者指定や発注作業が行われるということになります。これが、夢を描きながら実際に完成していくまでの流れですね。

もう一つの軸、縦軸はまちづくりの主体という観点です。これは、今述べた横軸の作業、まちづくりそのものを誰が担っていくのかという点です。まずは、その地域に住んでいる人々、あるいはそこに集うそれぞれの団体、それから居住地以外からの参加者。さらに、コンサルとか研究者が知恵を出すということもあります。時には行政が財政的に、あるいは法令上どのように関わっていくのかという側面もあります。あるいは民間業者の関わりと言うのもございます。それら横軸と縦軸が、色々と交錯して絡み合って、攻め合いとなり、また協力が生まれます。それによってまちづくりが進んでいくのかと思いますが、これは固定化されたものでなしに、まちづくりが進んでいく中で、これもまた様々に変化、変容していくのではないかと思います。

その具体的な事例といたしまして、私が関

わっています崇仁のまちづくりですが、これは市街地における密集地域を再生させる住宅地区改良法という手法を用いた街づくりです。この住宅地区改良法による密集市街地の再生という手法は、まず、不良住宅判定というのがございます。つまり、地域をブロック毎に区切りまして、そこにある住宅の不良度を一軒一軒調べていくんですね。全体が不良住宅が密集している、あるいは老朽住宅が多いということになりますと、たとえばいい家があったとしても、不良住宅判定が行われまして、地区指定というものが行われます。こうなりますと、個人的には売買がなかなかできない、ネットが張られるという形で、それを行政が中心になって土地や家屋を買収してまいります。それと前後して、住人と共に事業計画を立て、その計画にしたがって、住宅や地区施設を建設していくことになります。住宅が建設されれば、住宅用地の買収に応じてもらった方、もちろん買収に応じて地区外に出られる方もあるわけですが、この方々がその中に入居されていくという形になります。

そういう点では、この事業計画段階で、いわゆる自分たちの土地や家を買った後、どのような所に住んでいけるのか、あるいは私たちのまちがどうなっていくのかということを、住民と行政が話し合いながらまちづくりを進めるということになります。ですから、民間のように、あるいは公営住宅のように、計画から建設までは基本的に民間業者や行政が行い、建設後一定の基準に応じて公募して入居するという形ではないわけです。そういう意味では、建替住宅でありますし、事業協力者向け住宅ともいえますし、あるいは、相続権なんかも生まれてまいりますので、半ば永住権を持つ住宅、あるいは地区施設という形になるわけです。そういう性格上、地区内の住民と行政が、パートナーシップでまちづくりをするということが、非常に重要になってくると思っております。

ただ、これまで、自分たちの住んでいるところをリニューアルし、クリアランスして作り変えていくわけですから、その過程で地区内の各

種団体が、様々な意見の違いや対立が現実には起こるわけです。こういう状態が生じる場合、おおむね行政が意見の調整を行うことが多いわけですが、時には行政担当者が、団体の対立をいいことにして、事業を進めないとか、あるいは団体や個人の力関係に迎合して、買収金額が不明瞭になったりすることが原因となって、住民の不信が出てしまう。刑事事件になりましたけども、行政がいわゆる架空買収金をプールして、それを団体工作の裏金に使用していたというような事件もございました。あるいは地区の名前を利用した地上げなどが横行したときもございました。

そのような状況が長い間続いていましたことなども要因となって、事業がなかなか進まなかったり、アパートはどうしても画一的な住宅でありますので、子供が大きくなったら部屋が狭いとか言うようなことになっています。さらに、住宅地区改良法は地区外から入ってくることを前提としていない事業という側面もございます。それから、家賃の値上げなどが行われますと、それでは生活ができないとか、あるいはそのような家賃になるなら所有している不動産を売らないとか、さまざまな問題が出てまいります。そういうなかで、人口が流失して、少子高齢化が急速に進みまして、まちの活力が衰退していったわけです。以前は1万人くらいいたまちですけども、現在では人口が減りまして、1800人くらいのまちになってしまっています。

これではいけないということで、10年前にまちづくりというものをもう一度原点に戻ってやらないといけないということで、地元の団体が対立したり、足引っ張りしているのではまずいという形で、いろいろありましたが、崇仁まちづくり推進委員会というものを立ち上げました。一つこれが事業推進の核になっていこうということになったわけです。

ただ、核となる母体ができただけでまちづくりを進めるには、なかなか難しい面がございます。振り返ってみて、こういうことが戦略につながったのかなあと思えることをいくつかあげてみますと、崇仁では、まちづくりを推進

していくムード作りとして、祭囃子を復活させたり、鉦を（資料5）のようにボランティアで復元させながら、祭りを復活させるという取り組みから始めましたことがあげられます。もちろん当初は、まちづくりと祭りに関連する取り組みは明確な連動性を持っていたわけではありませんが、まちをどうするのかということとは一見かわりがないように思うんですけど、人々の理屈だとか経済上とつながりを一旦横に置いて、ふるさとという心情的な紐帯を高めることができました。

その点でもう一つあげるとすれば、やはり子供ですね。地域の未来を担う、大変減少して子供たちは少なくはなってるんですけども、やはり子供たちをつなぐ取り組みが行われたことです。子供がつながれば保護者がつながる。保護者がつながればおじいちゃんおばあちゃんがつながるといような形です。校庭にテントを張って校庭キャンプをしたり、親子ハイキングをしたり、こういうことをやってきたことが、住民のさまざまな意見や利害の違いを乗り越えてきた原動力になったと思っています。

そのような初期の取り組みの中で、「まちづくりは人づくり」「みんなが主役のまちづく



資料5



資料6

り」とか、「一周遅れのトップランナー」というようなスローガンをうまく作りながら、まちづくりを進めてまいりました。時間の関係で、概略しか述べることはできませんが、97年に「まちづくりの計画構想(案)」を策定しました。(資料6)は、その策定に当たって、「ふるさと探検隊」という取り組みの一部です。地元の子供たち、親、お年寄りの方も集まって、自分たちのまちを歩いてふるさとの良さ、昔はこんながあったということを語り合う。それを持ち寄って、意見交換会をする。このような取り組みを重ねるなかで、99年になりまして、「京都市崇仁まちづくり計画」という形で、行政と一体になったプランニングとしてまとめることができました。

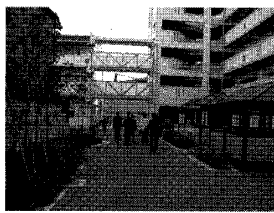
子供を核にするという点では、高瀬川が小学校の中を流れておりまして、河原町通りの拡幅工事で流路を変更することになりましたんで、小学校内にビオトープを作ることになりました。その過程で、工事を業者にすべて任せるのではなく、自分たちでやれるところは自分たちでやろうということになりました。穴を掘ることから、土嚢を積むことなど、いろんなことを子供や大人が、毎週土曜日に集まっては、作業をして、地域のつながりを強めていきました。

私が直接関わって部長をしています塩小路高倉ブロックの取り組みに限って、報告させていただきますと、02年には行政の方と地元の者が、まち歩きをし、家の中に入らせてもらって、階段とかトイレなどを見学して、生活の不便さを体験しました。それが終わったら、意見

交換をすることなどしました。

(資料7)と(資料8)は、そのブロックにお住まいの方々に集まっていただきまして、まちづくり推進委員会の進める全体構想について説明して、事業全体の中で、このブロックがどういう意味を持つのかということ話を話合っている場面です。住民の方、お年寄りの方が随分と増えて、やはり、高い高層のアパートは嫌だとかですね、自分の長年住んでいたところで死にたいとか、いろんな意見があるわけです。それらの人々といっしょになって、他のアパートで見学会をしたしまして、毎日の生活のイメージを少し描いていただく取り組みをしました。例えば、トイレに入る、和式の便所から洋式の便所が変わるとか、バリアフリーになるとか。残りの人生をどう過ごすか。あるいは、自分の子供たちと一緒に住めるようなスペースはどのようにすれば良いかなどの話し合いや、アンケートを取っていきました。

これらの意見をベースにして、行政とまちづくり推進委員会が素案を作ったものを、さらに住民の皆さん方に集まっていただいて、いろんな意見を聞く会の様子です。意見が出たものをポストイットに書き込んで、発表しあっているところです。そのような取り組みを踏まえて模型をつくり、崇仁のまち全体の人にこういう計画で作りますと公開しているものです。ようやく現在、ブロックの中の一つの住宅が出来上がってきました。4月入居になるのですが、アパートの部屋にはいろんなタイプを作ったり、



資料7



資料8

あるいは、子供の成長に応じて間取りを変えられたりするような工夫もしていただいたりしました。エレベーターの出たところに、コミュニティができたり、小学生やお年寄りの方の作品が展示できるような場所をとったり工夫をしています。アパートの角は、崇仁の鉾を収納できるスペースを作って、自分たちのまちの文化と生活というもののつながりを考えてみました。

振り返ってみますと、まちとくらし、人のいぶきをつなぐということを考える場合、それらをつなぐ「暮らし」をキーワードにすべきではないかと思いました。まちづくりをしている中で、どういうものを作るかということを通じて、やはり私たちは自分たちの暮らしというものを、もう一度振り返ってみました。そういうことをしながら、暮らしを夢見てみました。そのなかで、私たちの暮らしの方向を考えてみる。もちろん縦軸としては、どのような物的な施設を建てていくかということがございますし、横軸では、共に支え合って安心できる生活作りをどうして行くのか。そのソフト面といえるんでしょうね。

その縦の軸と横の軸との間に、様々な座標があるということがわかりました。例えば、家賃です。今自分の家は持ち家で、家賃を払ったことがない人がおられる。それが今後家賃を払っていくことになる。それがどういう意味を持つのかということですね。やはり、抵抗がある。それから、お商売をしている人は、自分の今営業しているところから、少し移動するだけで

も、商売やっていけるのだろうかという不安もある。そして、福祉施設は、どうなっていくのか。先ほども言いましたように、部屋割りはどうなるのか。あるいは、事業の中で外へ出て行った子供たちは呼び戻せるのか、あるいはコンビニとか、そういう外部施設を導入して、生活に潤いを持たせることができるのだろうか。子供とのかかわりはどうなんだろうか。ということです。

現在、崇仁では、まちづくりの座標の方向性を「青年や壮年層が定着して、人口が増加し、少子高齢化に歯止めがかけられるか」ということに集約化できるのではないかととらえています。一方では、崇仁のまちづくりが、崇仁だけにとどまるものではないし、京都市の人権や同和行政の座標にもなるし、駅前の再開発、特に三十三間堂や国立博物館のあるところへの中間位置にある地理の中で、人の流れを作りながら、賑わいを取り戻し、京都の駅前の再開発にどう結びつけていけるのかという視点でも考えています。つまり、崇仁のいわゆる人や土地は、崇仁の財産でもあるわけですが、京都市の共有財産でもあるんだという考え方をしています。その意味で、崇仁のまちづくりの座標の共有という視点も検討しています。

このような取り組みをやっていくなかで、行政と住民の中間集団といいますか、つなぎ役として、まちづくり推進委員会が特に心がけてやってきたことを振り返ってみますと、やはり原動力というものは、徹底した議論をするということにあったと思います。議論をしたら分かれそうにもなるんですけども、やっぱり汗かこうやと、痛みを分かち合おうやということを、常々お互いに言い聞かせながら、喧嘩別れになったら、誰かが引っ付けに行くというようなことをしながら行ってきたのではないかと考えています。

その中で見つけたキーワードが「住民から信頼される」です。不信感を持たれて、裏であいつらええことしとるんちゃうかということをお拭きするような、明瞭な取り組みが必要です。次のキーワードは「継続する」ことです。やは

り、やめてしまうと、事業が停滞するわけですから、続けるということが何よりの財産なんだということです。それから、「公開する」というキーワードです。取り組みをできるだけ公開にして、ちょっと役員が集まっているだけでも、その情報が伝わらないと、住民の間に不信が起こるもんです。そういう不信を起こさないために、常に会合を持ったり、話し合ったことを、公にすることです。「まちづくりニュース」を発行してまいりました。そして、最後はやはり、「成果を示す」ということが大事ですね。絵を描いても、なかなか進まないようでは、住民の心も離れていきますので、少しずつでも経過を見せていくということでやってまいりました。

以上が崇仁のまちづくりでやってまいりました報告です。

三林：ありがとうございます。では、本報告を受けまして、京都文教大学人間学研究所客員研究員、石川真作さんからコメントをいただきます。よろしくお願いします。

石川真作：石川です。ただいま、「まちづくりは人づくり」というタイトルでご報告いただいたわけですが、この街づくりの「つくる」というところから連続して全体のテーマとしての「育てる」という観点を含めて考えていったときに、本日のお話から色々と深く考えさせられる点があると思います。この場合は、住宅改良事業という形態から出発しているわけですが、広い意味で考えれば再開発という事業だと思っわけですね。一般的に再開発事業というものを考えたときには、一見そのままでは発展が見込めないような場所を、一回そこにあった社会と生活を含めたうえでリセットする、そうして、外側から見たときに、活用しやすい都市というものを建設する、というのが従来の型だったと思うんですね。そこに改めて、人や社会というものはめこんでいって、街に合わせて人を入れていくというような、そういうあり方が、一般的になっているような気がするんで

す。

また一方で、ニュータウンということを考えてみると、全く新しく街を作るわけでした、人が生活していなかった場所、入れ物ですね、そこに人や社会が入ってきているという形態であるわけですね。そういったやり方を考え合わせると、そこに欠けている、あるいは弱い部分ではないかと思われるのはですね、そこに元々あった生活であるとか、あるいはそこに人が入ってくる、そういう人々の元々の暮らしとの連続性という視点を考えていくことではないかと思うんですね。

そして、街が一応できて、今度暮らしが動き始めたときに、それが根付いて、育っていけるかという問題です。そういった、育っていける街のあり方というようなことがあまり考えられていなかったのかなという感じがいたします。それは、別の言い方をすれば、昨今の言い方ですと、持続可能性というような問題であるかも知れないと思うんです。つまり、作るということに主眼が置かれて、作った後にどのように育てていくのか、あるいは維持発展させていくのか、そういう視点が欠けていたのではないかと。つまり、持続可能な街づくり、という視点に、また一つの発展があるのかなという気がします。

これは、実際に見てみますと、再開発事業であれ、ニュータウンであれ、できた当初非常に華々しくできるわけですが、それが時間が経過していく中で様々な問題が生ずる、また単純に償却され、古くなってくるものも含めて、そのままの状態で行くわけではないということと考えますと、基礎的なことなんじゃないかなと思うわけです。そういう点で考えて見ますと、今回この場所京都で考えて見ると、別の視点ですと町家再生事業ですね、また一般的に言う、町並み保存といった事業にしても、その中にどれだけ、住まう側の暮らしであるとか、あるいははぐくむという視点があるのか、それを盛り込んでいけるのかということを考える必要があるのかもしれないですね。

町家再生ということを見ていてもですね、単

に外から見ていただけですけども、ハコとしてそれをどう利用するのかということが議論の主眼に置かれているという傾向が非常に強いような気がいたします。本日の報告を通して拝聴していても、全体にハコとしてのまちがどうであるかということより、そこに住まう人々の生活のせめぎあいと言ったことが、一つのテーマであるような気がします。それは今日的な問題なのかなという風に思います。どういう形態であっても、そういった街づくりを行うに際しては、住んでいる人々であるとか住もうとする人々、そこにある暮らしを含んで、再生、あるいはバージョンアップするのだという、そういう考え方が必要なのではないかということが、報告を聞いていまして思い至ったことです。そういうことが一方で「人づくり」かもしれないですね。街の形式に合わせて生活様式を提示していくというよりも、誰がどう住むかということを含めて街づくりを考えていく、人づくりを考えていく、ということなのかも知れない。そういう点では、本日のお話の中で、崇仁地区の皆さんが、長い時間をかけて、本当に非常に長い時間をかけられてですね、行政や業者と協力したりと、色々本当にご苦労なさって、あるいはご自分で加工してあるいは利用して、資本を確保して、進めてこられた、そういう中で、住民、環境、文化、歴史そういったソフト面を含めて、再生し育てていきたいと思いますという考え方、手法というのは、一つのモデルになるのではないかと感じました。以上です。

三林：ありがとうございました。それでは全ての報告が終わりましたのでここで、壇上を模様替えいたしまして、フロアの皆さんとセッションを図ってまいりたいと思います。それでは、フロアの皆様から様々なご意見ご感想いただければと思います。お名前を頂戴いたしましてご発言下さいますようお願いいたします。

フロア①：那波といいます。グリーンタウンに住んでいます。実は話をお伺いさせていただきまして、引きこもりの話が非常に印象に残って

おります。引きこもりということが、住宅とか色々な問題で調査されてる。それはそれで結構なんだけど、自分の意見としては、もう一つね、簡単に言いまして、一人の人間がどう生きるべきかということをついでに研究されて、調べて欲しかったなあと。引きこもりがええのか悪いのか。簡単に言いましてね。どうですか、皆さん。賛成されますか。僕はあんまり良くないと思うんですね。だったら、どうしたら引きこもりをなくしていけるかということ、そういう住宅の作り方、何とかかんとか。そういうところもありますけど、そういうところ、人間の心というんですか、医学的な問題もあると思いますけど。ついでにいうと、調査していただきたいな、考えていただきたいな、そういう風に思いました。一つよろしくお願いします。

三林：高石先生いかがでしょうか。

高石：もし、付け加えるとしたら、やっぱり引きこもりっていうのは、一つの生き方、選択肢の一つとして、一時期必要なものでもあるという風な考え方もあっていいと思うんですね。もう一步踏み込んで言うならば、それを保証するっていう考え方もあっていいと思う。川畑先生が人間の内的空間を豊かにするのは、対人関係であるということを言われました。私自身もそれを否定はしませんけど、同時にやっぱり、人と接するしかない世界はそれはそれで非常にしんどい。自分から動き出していくという力、エネルギーを蓄えていくためには、やっぱり、引きこもりの時期があってもいいし、それを保証する場所があってもいいし、そういうものを自分のライフサイクルの中に組み込んでいく生き方が、僕はあっていいんじゃないかという考え方を付け加えさせていただきます。

フロア①：もう一つ。最後の、人づくりとまちづくり。昔の言葉なんですけど、住めば都とか言う言葉がありますね。自分が住んでいるところが、人が一般的に言う都だというふうに、いいところだという解釈だと思うんですね。だと

すれば、指導者的な人が、住んだらいい町ができるのところがうか。もちろん自分が住み慣れた田舎でも都ですけど。そこらへんは、どういう風に学者、研究されている方は感じているか、ちょっと教えていただきたいんですけど。

竹口：私たちは、どこかに行って新しく新天地を開きたいという思いが一方あるわけです。しかし、どこに行っても、今度は生まれ育ったふるさとというものに愛着があるわけです。地域というものは二つが、重なり合っているのではないかなと。お商売されている方は、長年その町で根を張りながら、人と人とのつながりという点では定着を大切にするかも知れませんが、サラリーマンであれば、どこかに転勤したりして、人生いくつもの場所に住んでいくわけです。で、いくつかの場所に思い出がある。それはそれぞれの生活の中に関わっていくことではないかなと思っています。

ただ、やはり自分の生まれた町というのは、一つ原点になるのではないかなと思っています。自分のふるさとを誇れるといいますか、そういう生き方というのがとても大事じゃないかと思っています。そういう点では崇仁のまちというのは、色々厳しい状態もあるわけですがけれども、今必死になって、みんなで地域が手を合わせて、頑張って、誇れるまちにしたいなと思っています。まちと人をつなぐのは「暮らし」ではないかと私はキーワードに感じているわけです。アパートが建設されている様子を、入居予定の方々が見に行かざるわけですね。見ながら、夢をつないでいかざるわけです。あそこに入れんねんとか、どんな生活をしていくねんとか。そういう意味では、大きな集合住宅に入るというのは、ちょっとした移動ですね。同じフロアにどんな人が集まれるのか。そういうような思いを重ねながら、生活をしていかれるということですかね。お年寄りになればなるほど、なかなか生活の変更が難しいわけですが、残りの人生を、頑張ってきた人生を、どのように全うしていただくというか、少しでも豊かなつながりを深めていただきたいと思いますか、

そういうものと若い人たちの息吹をどのようにしていくかというようなことが大事になってくるのではないかと思います。

もう一つだけ最後に言わせていただくと、自分の暮らしを変えるということは、自分ひとりではなかなか難しいんですね。ところが、こういうようにまちづくりをしていきますと、隣の人のご意見とか、いろんな人の意見が入ってくるわけです。嫌なときもあるわけですが、自分ではちょっと無理かなと思っていることも、こうしたらひょっとしたら夢がつながっていくかもしれんよというような点で、自分の生活を複眼的にといいですか、まちを作るというのは様々な人たちのご意見を聞くわけですから、そういう意味では自分の暮らしを見つめたり、あるいは夢が重層的に広がっていくこともあるかなというようにも思っています。そういうことも大事なキーになるのではないかなと思いました。

フロア②：北檜島小学校区の青少年健全育成協議会の会長をしております、田中と申します。もうすでに、文教大学の先生方には、ニュータウンですとか、うちの地域のフィールドワークなどをしていただいておりますので、十分に問題点は知っていただいていることだと思っております。先ほどから、街を作るということ、人を育てるということもお話を聞かせていただきましたけれども、私たちの子供たちは、ここの地に育ちました。ふるさとしていうのは、里山があって、川が流れているからふるさとというのではなくて、生まれ育った所がやはり、ふるさとなんですね。そうすると、グリーントウンであるとか、ああいう本当に林立した大きい建物の中でも、自分たちはふるさとだと思って住まいをし、育っていくわけです。そうしたら、そこに、せつかく大学がある。この大学とどういう風に連携を取りながら、子育てに対する、まちづくりに対するご意見をいただきながら、実践者としてやっていけるかということを、私たちは取り組みのなかで頑張らせていただいているわけです。

昨年一年間、現代社会学科の先生方と共に、まちづくりということで一年間取り組みをさせていただきました。それ以前から、文化人類学科の先生方がフィールドワークをされているということで。私が感じましたのは、ここに大きな研究所みたいな形で、大学があるにもかかわらず、臨床心理学科の先生であるとか、文化人類学科の先生であるとか、現代社会学科の先生であるとか、横の連携をつないでいただいて、本当にこの地域のことを考えていただいているのかなということについては懸念をいたしております。行政でもそうですけども、非常に縦割りです。横のネットワークを作るといったら、逆に責任の擦り付け合いで、最終的にじゃあ誰が責任取るねんといったら、取られないことがよくあるわけです。

例えば、私、いくつかの大学を視察させていただいているんですけど、東京家政大学なんかはPFIの手法を使って、子育て支援センターを学内に作ってられます。下関の梅光学院も同じく生涯学習センターを学内に作ってらっしゃいます。学内につくることによって実践の場ということで、合わせて地域の開放ということもしてられてるんです。ぜひとも文教大学も、私たちが抱えている問題を共有していただけるような、そんな大学になることを望んでいるんですけども。

三林：今日のこの日も、本当にこの大学と地域とをつなげたいという思いで、企画いたしました。このニュータウンの未来像という研究班も3年間の終わりを迎え、このシンポジウムが締めくくりということになりますけど。今のお話を伺うと、これからまた出発なのかなという気もしてまいりました。今のご意見で何かコメントを。

西川：子育てネットワークについてはどうでしょうか。

三林：子育て支援に関しては、学科を越えてということもありますし。こちらのキャンパスは

大学と短大がありますので、そちらのほうも含めた形で子育て支援の何か活動ができればよいかなというのは、短大の先生ともお話をさせていただいています。

川畑：実は三林先生は子育て支援の研究をされていて、学生さんと一緒に赤ちゃんのいるご家庭に行って時間を一緒にすごすという、そういう画期的な取り組みをされているんです。こういう芽をこの大学はたくさん持っているという風に思うんですけど。ご指摘があったように、なかなか大学全体の中でそれが位置づけられないという辺は、どんどん、地元の方から大学を突き上げていただくというのがいいのではないかなと思います。

高石：隣もいわないから私が言いますけど。川畑先生も、川の向こう側、伏見のほうに住んでいらっしゃって、そちらのほうで研究所を作って、地域で活動しておられる心理のスタッフです。学生や地域のセンターの職員さんに対して啓蒙活動と教育活動をされている。私自身、今回報告しなかったんですが、引きこもりの方々への訪問カウンセリングを今現在企画していて、その活動をなんとかこの地域で興していくことはできないかと考えており、この大学から、活動を起こしていこうと思っているところです。

森：先ほど三林さんがおっしゃったように、この研究会は3年目を迎えます。今、田中さんがおっしゃってくださったように、私どもの研究会では田中さんをはじめとする地域の方々と以前からお付き合いさせていただいて、本当にお世話になっています。さきほど実は私自身、コメントの中で、ある意志をこめて話させていただいたつもりです。つまり、ニュータウンをなぜ研究するのかということが、ずっと自分たち自身の問いとしてあるということです。ニュータウンという場を、身近に持ちながら、何もしてこなかったのではないかなという、なんとなくすっきりとしない思いというか、本当に

何をどうすればいいのだろう、という思いから研究をスタートさせました。今朝も実は、グリーンタウンとニュータウンと歩いてきたのですが、どうやって人はここで出会っていくんだろうという問いが一層深くなりました。人は、つながらなくてはいけないし、色んなコミュニケーションをとらなくてはならない。議論もし、崇仁みたいに一生懸命何か作っていかなくてはいけないということは、みんなわかっているんだけど、どの地域でもどの社会でもみんな悩んで、必死に考えているんだけど、本当にそんな場というのはどうやったら作れるんだろうという思いが、関われば関わるほど深くなっていくというのが、私の実感です。

宇治の中でも、ニュータウンのエリアと、同時に中宇治のあたりでワークショップをさせていただいたり、研究させていただいているんですけど、人のまとまりというのが、歴史的に形成されていたところというのは、一度受け入れていただくとながりが広がっていくというのを感じています。ニュータウンのこのエリアでも、そういうつながりを作ってきてくださった方が、いらっしゃるわけです。それを次の世代にどうつなげていくのかということを、今本当に考えなければならないと思います。ただ、本当に、どういう関わり方を私たち自身していけばいいのかということを互いに話し合うところからはじめないと駄目なのかなというのを、今日感じました。

例えば、今日シンポジウムをして、こういう形で私たちが話をさせていただいているわけですが、この壇上とフロアの距離がどうやったら埋まるのだろう。何が一緒にできるんだろうということを話し合う所から、もう一回やり直さなければいけないのかなという風に思っています。私はさっき行政に期待しているという言い方をしたのですが、制度に乗せていくというときに、大学とか行政の役割制というのは非常に大きいと思うので、私も含めてですが、皆さんが持っている思いをこういう場でどんどん出して、お互いにそれをまとめてつないでいくということをやらないといけないんだなという

ことを思っています。学生さんもたくさん今日は来てくれています。まずそういう地域の思いがあるということを、学生さんにも知っていたいて、関わってもら。また教員はそこを橋渡ししていく必要がある。そこから、なにかやらないといけないなというのは切実に感じていますので、今後ともよろしく願いいたします。それがどういう形になるかというのは、もう少しお付き合いください。一緒に何かができればと思いますので、お願いします。

フロア①：今日は実は、槇島コミセンで、この学生さんが槇島小学校、北槇小学校の子供たちを相手にして、ケーキ作り、その他の遊びというんですか、人間交流のための活動をしていただいているんですよ。もう終わってるかも。1時まで。もう終わってるんですけどね。そういうことが、さっき田中さんがおっしゃいました、ここの文教大学さんが、槇島のために、お金のかかることなんですけど、あるいはこういう教室を年に2回か3回無料で貸していただいて、どうぞご自由にお使いください、そういうようなことをちょっと考えていただきたいと。学生さんは結構私たちの老人の集いになんかに来ていただいて、歌を歌ったりとか、色んな協力をいただいているんですよ。ついでにお願いするなら、こういう施設をお使いください、というような格好のものをちょっとお願いしたいなと思いますので、よろしくお願いします。

三林：ありがとうございます。そろそろお時間になってまいりましたが、他にどなたかございますでしょうか。

フロア③：大阪大学の鈴木毅と申します。今回のテーマの「育てる」は、今ある環境を前提として環境を少しでも良くしていく態度と方向性で、ニュータウンに限らず地域や環境にとって今一番大きな課題だと思います。

このテーマに関して最近しばしば感じるのは、戸建ての住宅地とニュータウンの違いです。大月さんが最初に見せてくださった例が象

微的だと思うんですが、戸建ての場合は、個人が何か思い立って行動することで、かなり環境を変えていきやすいわけです。空き地があって、誰かにアイデアとある程度の資金とやる気があれば、町並みまで変わってしまう可能性がある。でもニュータウンの場合は、インフラは整っているし、建物の質も高いわけですけど、逆に計画のスケールが非常に大きく、運営管理の組織も大きいし、土地の所有形式も違うので、個人にアイデアがあって頑張って活動しても、それがなかなか環境に反映しにくいというのをつくづく感じるんです。大阪大学は千里ニュータウンの隣なので、住人の人たちと色々お付き合いや共同の活動があります。千里は開発から40年以上経って、集合住宅や施設を建替える時期になっているのですが、その建替えの現状や結果を見ているとどうもあまり感心しない。住民のほうにはこういうコミュニティ活動をやりたいとか、こういう場を持ちたいとか、色々アイデアがあるんですけど、それが建替えの計画にほとんど反映されていない。自治体や行政に期待したいところですが、どうも大元の開発主体である大阪府は千里から明らかに手を引こうとしている。また豊中市は千里中央の文化センター建替えにあたって、せっかくの機会なのに、今までと同じような細かな部屋を詰めこんだ平面と建物を作っている。住民のほうにはむしろアイデアがあって、今までの活動や施設構成にこだわらなくていいから、建物はスケルトン・インフィル方式でやってくれとか要求をして、住民のほうにむしろ市の専門家よりも詳しい。ただ、それに全然行政が応えられないという状況がある。住民の色々な活動、色々なアイデア、今にふさわしいNPO活動とかを受け入れて建物や施設のあり方を変えていければいいんですけど、どうもそうになってない感じがす。最近こういう状況をしばしば目にするので、どなたか参考になるよい事例をご存知の方がいらっしゃれば教えていただければと思います。

それともう一つ、引きこもりの報告の中で、「玄関の隣」という話がありましたが、それは

「外への志向」ということなのか、それとも川畑先生のおっしゃられたように「家族から離れる」ということなのか非常に興味を持ちました。そもそも基本的なこととして引きこもりの人というのは外を歩くことはあるんでしょうか。つまり、近隣は歩かないけれども、たとえば知り合いがいない街であれば出歩くものなのかを知りたいのですが。

竹口：最初の質問の答えになるあるかどうかわかりませんが、行政の方というのは大体3年とか5年でどんどん変わられます。私たちは地域にずっといて、新しく変わってこられた行政の方に、また一からあでもないこうでもないということになるわけです。そこで考えたのは、まちづくりは人づくりというスローガンのなかに行政の人間も入れちゃおうじゃないかということです。部署を異動しても、崇仁のファンですかね。

行政の方が、お孫さんなどと一緒に京都駅からJRに乗って通ったときにお父さんやおじいちゃんが、一緒につながって育ってきた町やと、誇りを持って語れるような行政の方々を、まちづくりの中で育てていかならんかなということをおもっています。崇仁ファンのOB会とかいうような方々が生まれています。

行政という機構はどうしても異動があるわけで、去っていく人は去っていくし、しかしつながって気にかけてくれている人はいるわけですよ。そういう人は大事にしながら進めていくと、部署が代わられてからも、色々発言をさせていただいていることが、案外力になることもあるんですよ。同じ行政の中で、横のつながりですよ。局長あたりに出世されますと、またまた力が出てくるかもしれないという意味で、根気強く、粘り強く言うべきことは言いながら、人もつなげていくということが、案外潤滑油になっていると考えています。

三林：大月先生いかがでしょうか。

大月：鈴木先生のご指摘はごもっともだと思います。

ています。集合住宅の団地と戸建ての団地と比べて、やはり戸建ての団地のほうが個人個人の活動が、そのまま表に出てくる可能性が非常に高いです。集合住宅団地の場合だと、なかなかそれが表に出てきにくいというのは、物理的な理由もありますが、やはり先ほどからありますように、それを管理していくソフトが30年前に考えられたままなんです。つまり、30年人間が生きてきたノウハウが蓄積されていないような管理スキームになっていることが問題だと思います。

そうしたときに住民の側から、管理する側に対し、あれもやらせてくれ、これもやらせてくれという風にずっと言い続けていくというのも大事だと思うんですが。その際によくありがちなのは、「団地自治会VS公団の団地管理部」という対立関係がすぐ生まれて、ずっと何十年も敵対関係になったりします。公団の人にとっては自治会にはいろいろ言われるから、できれば付き合いたくないというのが本音ではないでしょうか。そういう不幸な関係がずっと継承されているのは、住民の方にも責任があると私は考えていて、いつも一方的に管理者を糾弾して要望を突きつけがちです。まちづくりをやっていく際の用語として、「ワン・コミュニティ」という言葉があるんですが、大学も専門家も住民も行政も、一つのコミュニティになって取り組んでいくような姿勢で取り組まなきゃいけない、という意味です。これこそ、先ほどお話があった「まちづくり＝人づくり」の持っている意味だと思います。

もう一つは、できることからやってみればいいと思うんですね。先ほど横浜島のニュータウンを見学させていただいたときに、一階の足回りは基本的に芝生になっていたりするわけですが、住民の人が本当は植えちゃいけないとされているところに色んなものを植えていて、「耕されて」いるわけです。私が紹介したのは、戸建て団地で空き地を耕していた事例ですが、集合住宅団地では、屋上や廊下を耕してみるとか、階段室を耕してみるとか、駐車場を耕してみるとか、いろんなことが考えられます。例え

ば、壁面に絵を描いてもいいと思います。例えばそういう耕し方をみんなで工夫する。一回ゲリラでやってみて管理者や行政が納得するんだったらそれでいいし、それが面白くなって、じゃあ補助金だそうか、あの議員にお願いして、今度条例作って、補助金出させようとか。そういう具体的な発想が続いていって、それでようやく制度が変わると思うんですね。私いつも言っているんですけど、インフォーマルな制度（活きた制度）が、いつの間にかフォーマルになっているというプロセスこそが本質的なのではないのでしょうか。

三林：引きこもりのご質問について、簡単をお願いします。

高石：家族に会いたくないということは、もう一歩踏み込むと、彼らは自分のペースで動きたいということです。つまり、家族から監視されたくないから、玄関付近を選ぶ。そして、そとに出て行って彼らは何をするかというと、買物に出かけるんです。コンビニエンスストアとか、あるいはインターネットで注文した実物を見に行ったりとか、あるいはコミケに行く。基本的に彼らは物を外から取り入れるために、自分なりのペースで物を取り入れるための通路としての玄関、その近所の部屋が欲しいという動きを彼らはしているように思います。ただ、もう一歩踏み込んでいったときに、彼らは人も希求している。学校に行くようになった人が、ポロっと言ったんですけど、学校の先生がだいたい月一回のペースで、毎月毎月来ていた。最初うっとうしいなと思っていただけでも、そのうちその先生を心待ちするようになった。つまり、そうやって窓から覗きながら、人が自分の家に、あるいは自分の部屋に入ってくることを彼らは求めているし、実は彼らの側から見ています。引きこもってシャットダウンしているのではなく、玄関に誰が来ているのか、非常に敏感に見ている。そこの部分も非常に大切だと考えています。

三林：ありがとうございました。最後に、京都文教大学文化人類学科教授、杉本星子さんより、総括のコメントをいただきます。

杉本：今日は、皆様本当に貴重なお話をありがとうございました。また、フロアからのご意見、ありがとうございました。最初に西川さんがお話くださいましたように、今日のシンポジウムのテーマは、「まち」という地域空間のなかでどのように人間関係を育てていくかを考えることでした。

高石さんのお話の中に、引きこもりという言葉が出てきましたが、考えてみればニュータウンという「まち」は外周という境界線で囲まれていて、それ自体がある意味で引きこまれる空間になっているわけですね。ただ、高石さんの調査によると、実は逆にニュータウンというのは引きこもらない空間なのかもしれないということでした。引きこもりというのは内側に引きこもっているようで、外に開く、あるいは外を見ている。外との関係というのが、実は何か探られているのではないかとするなら、それは、ニュータウンも同じなのかなと思って伺っていました。

さらに、大学はどうでしょう。京都文教大学は、周囲を壁に囲われていまして、ある意味では、ニュータウン最大の引きこまれる部屋になっているという現状ではないのかと思うんですね。実際、大学は、中にエネルギーを溜め込んでいて、そのエネルギーをどう向けようかと、実は外をうかがっている場でもあります。川畑先生がおっしゃっておられましたように、引きこもりの期間もある意味大切であって、その場も確かに確保しなければならない。大学にはそういう意味もあると思います。ただ、同時にそこに引きこもっているだけでは駄目なわけです。私たちがここで、本当に学生を育てていこうと思うならば、まず私たち大学の教員や学生が、この引きこもりの場を確保しながらも、やはり、同時に出て行かなければならないということを、今日改めて考えさせていただきました。

大学の地域連携が、昨今ずいぶん語られています。多くの場合、町おこしに大学が協力するというような新聞記事になって出ているんですけども、しかし実はそういうことではないのだということが、今日皆さんと共有できたのではないかと思います。教員も学生もですね、ここから出て、地域の方と一緒に、それから地域の子供たちと一緒に、地域の中で成長していけるようになることが、本当の意味で、大学が地域に根ざすということなのではないかと思います。子育てと地域社会という問題は、実際に私たちが真剣に取り組んでいかなければならない問題だということは、子供をめぐる犯罪が相次ぐ今日、改めて申し上げることもないのですが、私は、地域で人間関係を育てることの大切さをもうちょっと別の視点からも、実感しております。

私の専門は南インド研究でして、学生時代にフィールドワークをしたのが、去年の12月にインド洋津波の被災地になった地方だったんですね。今年の2月に被災地を回りながら、仮設住宅や被災者住宅の建設といった問題は、暮らす側の視点から考えないといけないということを感じたのですが、それ以上に考えさせられたのが、地域の人々のネットワークという問題でした。現地でいろいろお話を伺っていてわかったのは、巨大津波が来たすぐあとに、その緊急事態に対応して効率よく、救助活動できた組織とか、その後も持続的な復興支援のなかで非常に大きな役割を果たしている組織は、大金を持って鳴り物入りで入ってきたNGOではなくて、災害が起きる以前から、現地に根を張ってその地域の貧しい農村女性の生活援助のために努力を続けていた地元のネットワークであったり、あるいは、地域の学校を核にしたネットワークで集まってきた若者たちだったんです。

津波で跡形もなく崩れ去った家が並ぶ大通りに立って、もしこれが向島だったら、例えば宇治川の決壊で、この地域一帯が濁流で襲われたとしたら、私たちの大学は地域の人々の救援のためにすぐ動けるのだろうかと考えて、正直って絶望的な思いがいたしました。大災害が

起きたときに、ニュータウンに暮らす方々の間で、それからニュータウンの皆さんのすぐそばにある大学の私たちの間に、普段からお互いに顔を知った関係でつながった人間関係というのはどのくらいあるのでしょうか。それが一刻を争う救助活動や緊急避難のための情報収集に、どれだけ大切なのか。ただそれはすぐに、そのときに作るものではありません。ですから、ニュータウンを開いて、大学も開いて、その双方にいる人たちを結ぶということを、少しでも早く積み上げていくこと。つまり、ここにいる一人ひとりが地域で、それぞれの人間関係を育てていくことが、ただ大切だということではなくて、実は緊急課題なのだというのを、私は改めて考えさせられました。

だからといって、私は、災害や事件に備えて地域のネットワーク作りをしようという提案をしているわけではありません。それはとても窮屈な監視社会を作ることになってしまうのではないかと思います。そういうネットワークもあってよいのですが、今私たちがやるべきことは、そういった災害のためのコミュニティ作りというのではなくて、先ほどの竹口先生のお話に、地域のお祭りを再興することで、子供を核としたつながりを育てていくという崇仁の皆さんの紹介がありましたけど、私はこういうものかなと思います。みんなで、何か楽しいものを企画して遊んでいく。その楽しい思い出が人間関係を育てて、それを地道に積み上げていくことで、一見すると、ばらばらなネットワークがいろんな風にあるだけなのですが、実はその重層的なネットワークが幾重にも重なっている。それが実はすごく大切なのではないかと思います。

一般にニュータウンというと、人間関係が気薄だといわれます。しかし、この3年間の共同研究を通して、ニュータウンにお住まいの方たちからいろいろな話を聞かせていただく中で、実はそうではないんだと、ニュータウンには実はいろいろなネットワークがあったということをお教えいただきました。学校関係とか、野球やサッカー、スポーツ、お稽古事、パートやア

ルバイト、コーラスやテニスといった趣味、それから、子育て期の文庫活動から始まって、子供が成長した後も友達関係が続いたりとか。そういった人間関係が、歩ける距離、自転車で行き来できる距離に暮らす人の間でしっかり作られている。それらはばらばらですし、学区や街区の範囲に限定されていたり、あるいは逆にニュータウンを越えていったりと、いろいろなですけども、実はそうした様々な個人のネットワークがニュータウンという一つの地域空間の上に重層しているというのが、非常にニュータウン的なあり方なんだなと思いました。

今日、お願いしたいのは、ここに大学を入れていただくこと。つまり、田中さんが言ってくださいましたけども、大学の知的資源みたいなものも、そして教室のような施設も含めてですね、今後、ぜひ皆様に利用していただき、それによってネットワークをさらに育てていくことができないかと思います。つまり、最初に大月先生のお話に出てきました、ニュータウンの「へそ」ですね。その一つに大学がなって、この「へそ」の周りに過ごす人たちと一緒にこの街全体を耕して、街を生き生きさせていく。そのとき、森先生がコメントされましたように、緊急時に「へそ」を押すと、行政とつながるとか、海外にまでつながるとか。大学というのはそうした何か「へそ」的なものを、目指すべきなのではないかなと思います。

文教大学の臨床心理学科にはスクールカウンセラーを目指す若者たちがいます。現代社会学科にはビジネスの起業を目指す人たちがいます。文化人類学科には、地域文化を勉強したり、社会調査の方法を学ぶ学生がいます。それぞれの学科の先生たちはまたそれぞれの専門の学問を通して、日本全国だけではなく、海外に広がる人間関係のネットワークを持っています。ですから、大学が引きこもりから出て、地域の皆様のネットワークとそのネットワークを重ねることによって、一緒に何かを企画したり、相談しあったりすることで、大学を媒介項として、地域の中で今までつながらなかったものをつなげていくとか、さらにそのネットワー

クを広げていくなら、それがいざというときに機能するかもしれません。普段はインフォーマルなんだけど、いざというときにはフォーマルにもなるというような関係の構築を頭の片隅におきながら、みんなで楽しいこと、好きなことをやりながら、たくさんのネットワークの拠点を作っていく。私たちはそういうことを目指していけるのではないかと思います。今回のシンポジウムをとおして、私たちに与えられた課題は、大学の「へそ」構想を具体的にどうするのか。それについて、皆様と相談していくことだなあと思います。

それを形にしてゆくのはなかなか難しいことなので、是非地域の皆様にご協力いただきまして、そういう空間を一緒に育てていただければと思います。皆様、本当にこの3年間研究会で色々お世話になりまして、ありがとうございました。そして、これからも、一緒に活動をさせていただきたいと思います。よろしくお願いいたします。

三林：ありがとうございました。予定を25分すぎてしまいましたけども、その分充実した時間になりました。ご来場いただきましたフロアの皆さん、壇上の報告者、コメンテーターの皆さん、どうもありがとうございました。

(了)

同時開催イベントの様子



資料9 イベント会場風景



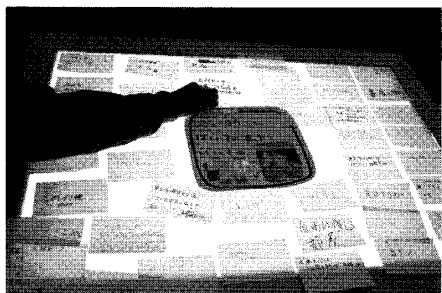
資料10 「ダンボールでオウチをつくらう！フィンランドのレイキモッキ」ワークショップ実施風景



資料11 「西川3回生ゼミ・ニュータウンの絵はがき展示」実施風景



資料12 「休憩タイム・喫茶ハグクミ」実施風景



資料13 「喫茶ハグクミ」に設置された、来場者による書き込み「ニュータウンにほしいもの・あったらいいもの」